愛知学院大学
第190回モーニングセミナー

名古屋市制施行から133年
～昭和のなごやを回顧すれば～

樹林舎　社長　山田　恭幹　氏

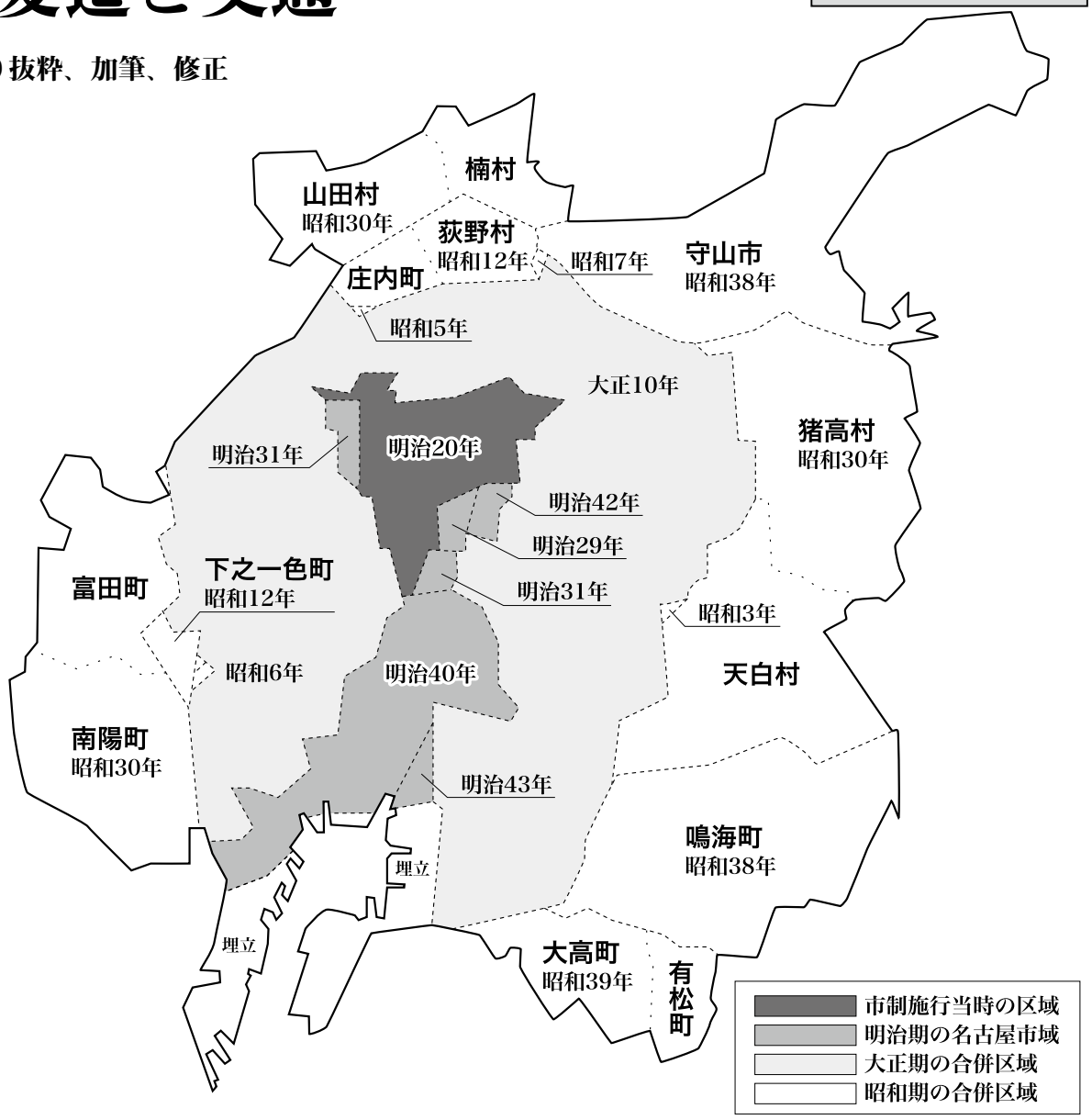
2022年1月11日(火)

現在の伏見通と桜通が交差するあたり

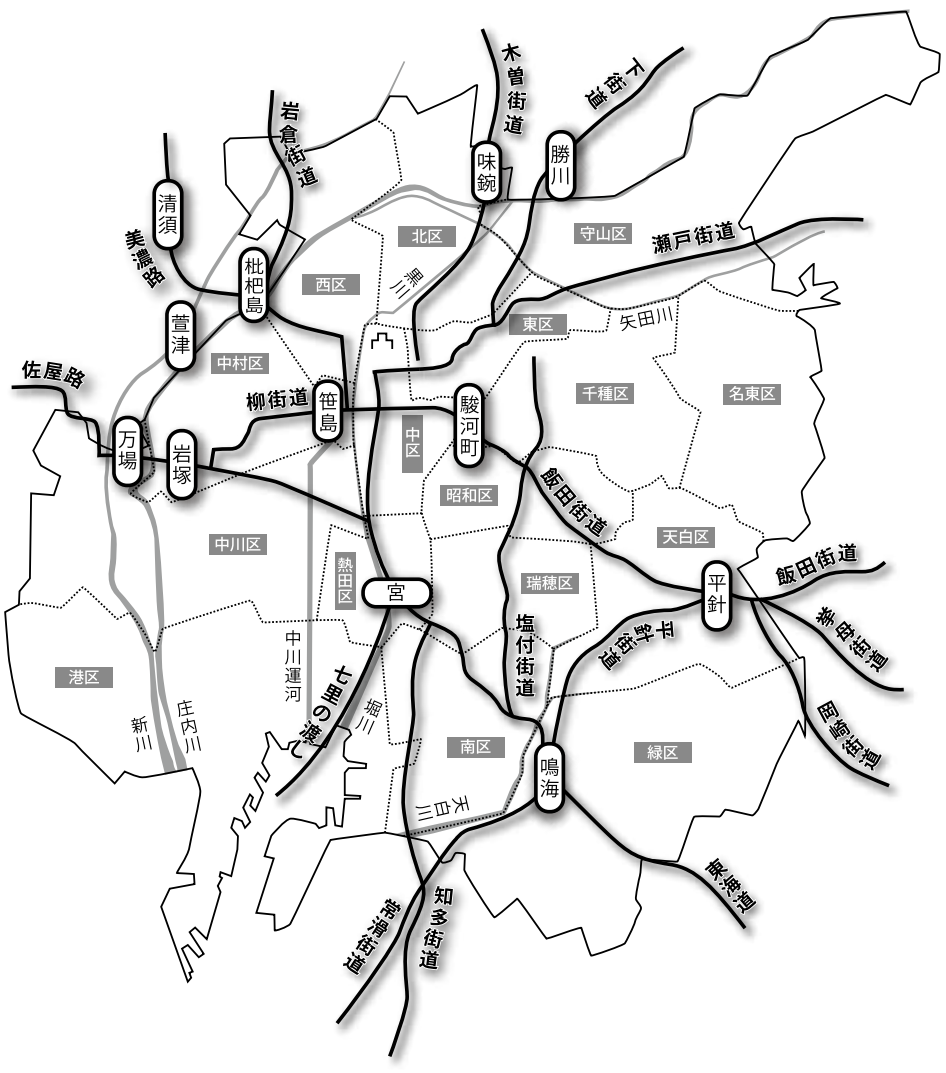
名古屋の市域変遷と交通

樹林舎「今昔写真集」「昭和」より抜粋、加筆、修正

市域の変遷図



第Ⅰ～Ⅲ巻の地域



名古屋のシンボル　城と金鯱

戦災後の名古屋城

（中区本丸　昭和 30 年頃）

名古屋城は大天守と小天守を組み合わせた江戸初期を代表する城郭建築。大天守の高さは地表面から 55.6 メートルあり、18 階建てのビルに相当したが、昭和 20 年 5 月の空襲によって焼け落ち、その後、10 年以上天守閣のない状態が続いた。それでも市街の復興が進み、暮らしが落ちつきはじめた 20 年代後半には、城を訪れる人が現れ始めた。彼らは石垣だけになった天守閣を見て何を思ったのであろう。

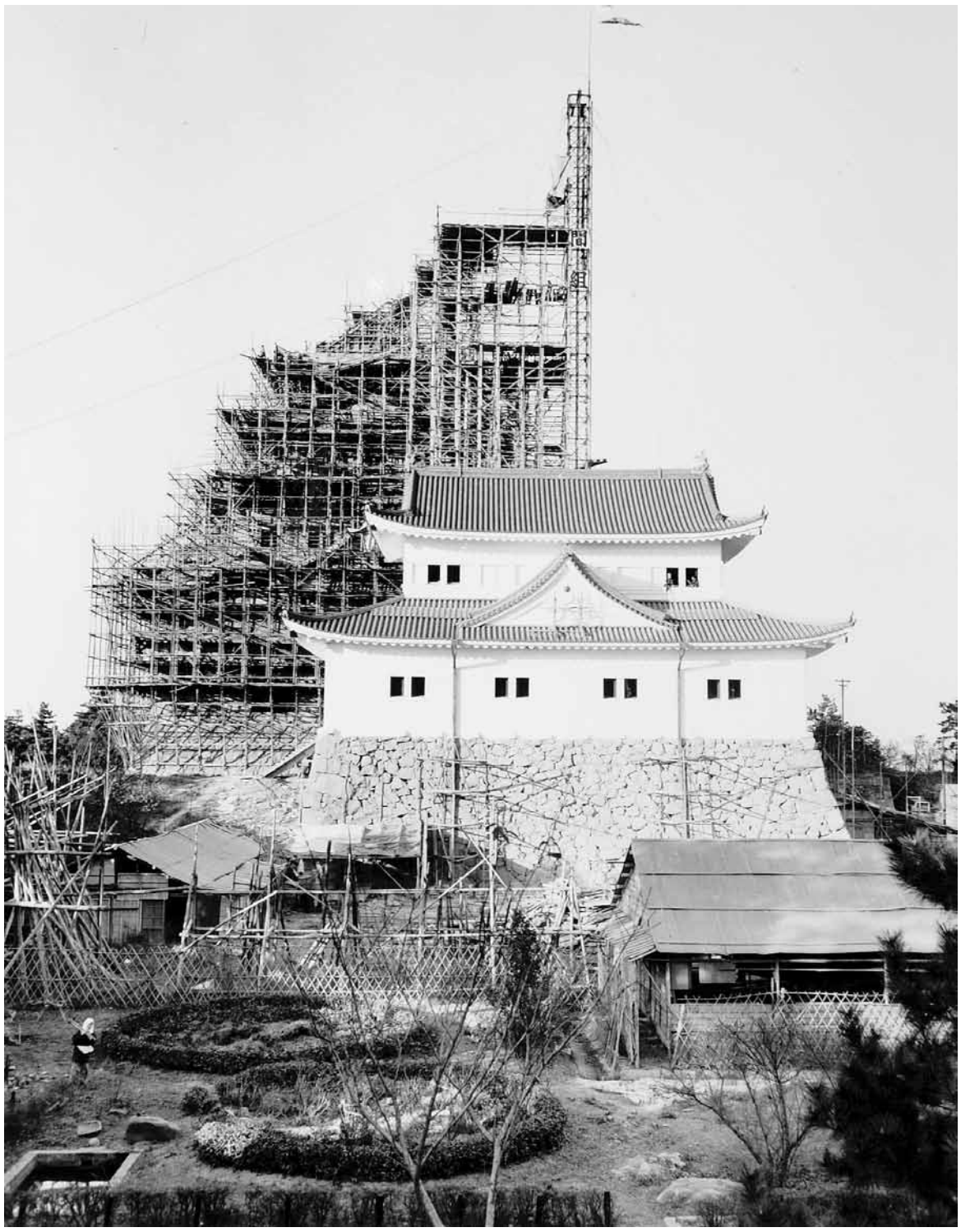
（提供＝名古屋市市長室広報課）

再建工事が進む天守閣

（中区本丸　昭和 33 ～ 34 年）

天守閣の再建を望む市民の声はあったが、日々の暮らしがやっとという状況の中で、実現にはまだ時間が必要だった。昭和 34 年の名古屋市制 70 周年に向けて再建運動が始まる。

（提供＝名古屋市市長室広報課）



日清戦役の記念碑がそびえる官庁街

明治 40 ～大正 7 年

中区新栄町

人力車の並ぶ背後に見えるのは愛知県会議事堂、その右手が愛知県庁舎、手前に見える屋根が、名古屋市役所の一部である。右手の砲弾をかたどった記念碑は「日清戦役第一軍戦死者記念碑」で、日清戦争の戦死者 726 人の慰霊のため、明治 33 年市内電車の終点「県庁前（久屋町）」に建てられたものである。その後、同 36 年に電車が記念碑に沿って半円形に迂回し、千種区の西裏まで延長された。

（提供＝松山昌平氏）

現在▶

正面の栄第一生命ビルの右隣に建つ NTT 栄ビル西館の位置に県会議事堂、その前の道路に記念碑があった。県会議事堂が記念碑のすぐ北東にあったため、電車がカーブする時のレールの軋む音が議事を妨げるとして、記念碑は大正 9 年、現在地の覚王山に移された。市役所跡地は、現在中区役所の入る栄サンシティービルになっている。

（撮影協力＝中区役所）

広小路を東から望む

大正末〜昭和初期
中区新栄町

栄町交差点の少し東側から西を見たもの。写真両側には煉瓦造りの日本銀行名古屋支店、日本生命名古屋支店、いとう呉服店など、美しい意匠の洋風建築が建ち並ぶ。〈提供＝山田實氏〉

鉄道 5,000 マイル達成祝賀に沸く県会議事堂

明治 39 年
中区新栄町

新橋〜横浜間 18 マイルから始まった日本の鉄道網は、明治 39 年、総延長 5,000 マイルに達した。5 月 20 日、これを記念した大祝賀会が全国の鉄道関係者 1,700 余人参集のもと名古屋で開催された。はじめに奉告祭が東本願寺名古屋別院で行なわれ、午後から祝賀式典が愛知県会議事堂で開催された。手前の祝賀アーチは名古屋駅前にも飾られた。

（個人蔵＊）

桜通建設前のようす

昭和 10 年頃

中村区那古野一丁目

桜通は昭和 12 年の名古屋駅完成とともに開通した。写真は昭和 10 年頃、堀川西側付近から西の景観である。正面に見えるのが、建設中の名古屋駅である。南側の建物を立ち退かせて拡幅工事が行なわれたようすが見て取れる。

（提供＝財団法人名古屋都市センター）

現在▶

桜橋西詰から桜通を西に向かって見ている。桜通建設当時、ほとんど平屋か 2 ～ 3 階建てばかりだったこの一帯も、今では JR セントラルタワーズやミッドランドスクエアをはじめとする高層ビルが林立している。銀杏並木も大きく成長し、街路樹が少ないといわれる名古屋の道路の中で、桜通はとりわけ美しい通りとして人びとに親しまれている。

納屋橋竣工記念の饅頭売り出し

大正 2 年

中村区名駅五丁目

堀川開削時に木橋で架けられた納屋橋（なやばし）が、現在にその姿を残すモダンな橋として竣工したのが、大正 2 年である。それを記念して、当時から納屋橋西詰め北側にあった饅頭（まんじゅう）店が売り出しを行なった。明治 19 年に「伊勢屋」の屋号で創業したこの店は、近代的な納屋橋の竣工にあやかり、屋号を「納屋橋饅頭」と改めた。竣工記念の際には、三代夫婦による渡り初めも行なわれたという。

（提供＝財団法人名古屋城振興協会）

現在▶

納屋橋饅頭本店は、変わらず今もこの地で親しまれている。一方、周囲には中高層のビルが建ち並び、ひっきりなしに車が行き交う。今では歩行者天国でも実施しない限り、大正の頃のような人出は見られそうもない。

大須・赤門通付近の町並み

昭和 15 年

中区大須三丁目

右手前の建物は大須の公設市場で「市民の台所」として食の安全を守ってきた。市場前から赤門通を西に見ている。酒屋や米屋、西洋料理の店にレコード店と、多様な店が軒を並べる賑やかな通りである。

（提供＝財団法人名古屋都市センター）

現在▶

右手前の公設市場は今も営業を続けている。赤門通は大須の電気街を代表する通りのひとつとなり、パソコンやオーディオ機器ほか、映画や音楽、ゲームソフトなどを扱う店が軒を連ねている。

国道１号八丁畷東より西方を見る

昭和 14 年

瑞穂区内浜町～桃園町

現・松田橋交差点の 200 メートルほど西から、内浜の交差点付近を見た景色と思われる。八丁畷（はっちょうなわて）は、山崎川に架かる山崎橋と精進川に架かる裁断橋まで、旧東海道がおよそ八丁（約 870 メートル）あり、田と田の間を逢う縄のような道だったのでこの名が付いた。海が入り込み眺めのいい一帯だったという。内浜神社は、かつては八丁畷の里の街道筋に祀られていたが、国道拡張のため昭和 12 年 6 月、現在の地に移された。

（提供＝財団法人名古屋都市センター）

現在▶

松田橋交差点西の歩道橋上から国道１号に沿って、西の方を眺めている。近くには八丁畷公園があり、かつて用水に架かっていた松田橋がその親柱（おやばしら）を使って復元されている。

（撮影＝寺崎友行氏）

廃止直前の押切町駅

昭和 16 年

西区押切一丁目

岐阜方面からの玄関口だった押切町駅。新岐阜から名古屋駅前乗り入れを目指していた旧名岐鉄道は、昭和 10 年の新一宮〜笠松間開通により、ようやく押切町までの直接乗り入れを達成した。押切町駅は、文字通り名古屋の玄関口のひとつとなっておおいに賑わうが、この年の新名古屋駅完成により、その役目を終える。昭和 16 年といえば太平洋戦争開戦の年、駅頭の多くの看板に混じって「戦傷勇士には席を譲りませう」という一文が、時局を感じさせる。

（提供＝名古屋鉄道株式会社）

現在▶

中央の建物が西区役所。その向う側に回り込むように伸びた細い道路。押切交差点北側にあるこの道を、かつて名鉄電車が走っていた。現在、西区役所が建つ場所に、押切町駅があった。

雨の仲田本通

昭和 10 年

千種区仲田二丁目

錦通の仲田北交差点から南に見た雨の日の仲田本通。錦通から覚王山通までの南北 80 メートル程の道の両側には、写真の乳母車店や古着屋をはじめさまざまな商店が 15、6 軒もびっしり並んでいた。この通りは、付近にあった陸軍造兵廠ほかの工場で働く人たちの通勤路にもなっていて、売り出しの日や土日の夜などは、通りが人であふれかえるほど繁盛したという。

（提供＝木村哲男氏）

現在▶

飲食店を中心に今も多くの店が軒を連ねている。自動車の交通量が増えたことで、一時の賑わいは失われつつあるが、今も前方の覚王山通を歩く人は多い。

桜橋の架橋工事

昭和 10 年頃

中区丸の内一丁目～中村区那古野一丁目

堀川は、名古屋城築城に際し、資材運搬や城下の交通路、生活水路として開削されたが、以来名古屋の発展に大きな役割を果たしてきた。川沿いには、材木店や製材所のほか、塩や魚などの各種問屋が軒を並べていた。桜橋（さくらばし）は、その堀川に架かる桜通の橋。写真は、桜橋の架橋工事風景を上流の中橋から見ている。

（提供＝財団法人名古屋都市センター）

現在▶

両岸にびっしりと留め置かれたはしけや船は姿を消し、代わって中高層のビルが林立している。かつて川沿いで商いをした人は、荷受けを堀川に向けて行ない、店は反対側の道路に面して開けていた。車社会が到来し、川に目を向ける用はなくなって、その機能も失われた。

雁道商店街

昭和 11 年

瑞穂区雁道町

雁道（がんみち）商店街と賑町商店街の交差点から西を眺めている。右手（北側）の自転車店には、宮田自転車「サンライス号」の看板が見える。明治 37 年に東京砲兵工廠砲具製作所熱田分工場が建設され、その後、新堀川沿岸に工場が相次いで建てられると、高田街道沿いに、工場へ食料品や生活用品などを供給する店や飲食店、日用品を扱う店などが開店した。昭和 10 年頃、雁道商店街は最盛期を迎え、鶴舞や笠寺辺りからも人が集まり、円頓寺（えんどうじ）と並ぶ賑わいを見せた。

（提供＝木村哲男氏）

現在▶

自転車店の建物は、大正 13 年の建築で、その後、伊勢湾台風の際も補修を重ね、今も現役の店舗として活躍している。向かい側の家並みもずいぶんと変わり、人通りも少なくなっている。商店街の奥を左右に横切る高架道路は名古屋高速 3 号大高線である。

（撮影＝寺﨑友行氏）

焼け跡にやってきた占領軍

広小路を東に遠望する銀行、保険会社など鉄筋コンクリート造のビルが栄に向けて並ぶ途中に朝日神社の社叢が黒く浮かぶ。写真手前の焼け残った公共トイレは、やはりコンクリート造。その左脇、木造家屋の庇の下ではリヤカーに板を敷いて、あり合わせの店開き。その後ろではハシゴをかけて壁の修復、瓦礫の撤去が始まっている。〈中区栄・昭和 20 年〉

◀船に乗ってアメリカ兵到着　10 月 28 日、進駐軍と呼ばれたアメリカ兵を乗せた軍艦が、名古屋港に着岸した。甲板には貨物と人が溢れている。鉄のヘルメットをかぶった若者たちに紛れ、ポケットに手を入れて立つサングラスの士官らしき人影も。〈港区・昭和 20 年〉

▶雑嚢を肩に次つぎと上陸　兵士たちは、すでに敵兵ではない。名古屋市では観光写真協会（sight-seeing photo club）を組織し、日本の文化や名古屋市の紹介を図った。協会の発会式は 10 月 27 日。翌日に上陸したこれら進駐軍の写真は、29 日には名古屋駅構内や市役所に貼り出され、市民の展覧に供された。翌 11 月には松坂屋で、名古屋の名所や日本の女性美、暮らし、子ども、四季の姿――をテーマにアメリカ人向けの写真展が開かれた。〈港区・昭和 20 年〉

〈写真提供 = 青柳総本舗〉

新しいシンボル・テレビ塔

人気の高かった４階スカイサロン
（中区錦三丁目　昭和 29 年）

開業当初、地上約 30 メートルで周囲が総ガラス張りの休憩サロンからは、かなりの眺望が得られた。当時の観光絵葉書によると、このフロアには「観光に見学に遊歩道の設備あり、中京特産品、切手、煙草売場の備えあり」と書かれており、文字通り名古屋の新しい観光名所となった。
（提供＝名古屋テレビ塔株式会社）

テレビ塔と久屋大通公園
（中区錦三丁目　昭和 35 年）

名古屋の新しいシンボルとなったテレビ塔。かつてはその足下から県庁や市役所まで見通せた。久屋大通公園の樹木が成長した今は、同じ眺めは望めないが、公園内は都心にありながらせせらぎと緑を楽しめる、文字通り都会のオアシスとして市民に愛されている。
（提供＝名古屋テレビ塔株式会社）

瀬戸線終着「堀川駅」

昭和 30 年

中区三の丸一丁目

明治 44 年 10 月に開業した堀川駅は、人の乗り降りより、瀬戸市から陶磁器を運び入れ、堀川で待つ船便で全国へ積み出すことが主目的であった。堀川駅から川面まではスロープ状になっており、そのまま荷降ろしができるようになっていた。左後方は名古屋城の石垣である。（撮影＝楠正昭氏）

三の丸三丁目・土居下〜堀川間の約 2 キロ区間は「外壕線」と称し、城の外堀をそのまま鉄道敷に利用したもの。瀬戸電（せとでん）は「お堀を走る電車」として親しまれた。なかでも土居下〜大津町間にはサンチャインと呼ばれる急カーブや名物の S 字カーブがあった。昭和 14 年には名鉄瀬戸線となったが、以降もかわらず「瀬戸電」の名で市民に愛された。（昭和 46 年・撮影＝神田裕三氏）

現在▶

昭和 48 年に無人化された堀川駅は、瀬戸線の栄乗り入れに伴い、外堀区間の土居下（どいした）〜堀川間が同 51 年に廃止された。堀川駅構内は現在、駐車場となっているが、石垣と堀などにより現役時代の面影を偲ぶことができる。外堀通に架かる景雲橋（けいうんばし）の東詰北側に位置する。

市立大学病院電停の 1426 号

昭和 49 年
瑞穂区瑞穂町

戦後、桜山近辺は市電が三方に通じて交通の便がよくなり、商店街も活気を帯びた。昭和 41 年には市立大学病院が現在地に完成、東海地区の中核的な医療センターとなった。市電の役割も高まり、電停名も桜山町から市立大学病院へと変更された。写真の市電 1426 号車は 1400 型といい、昭和 12 年の汎太平洋博を機に標準化された名古屋市電が誇る省エネ車両である。三角屋根の建物は、病院敷地内に残っていた剣稜会館で、名古屋高等商業学校（現・名古屋大学経済学部）同窓生のための親睦クラブ「其湛会」が入っていた。

（撮影＝楠正昭氏）

現在▶

三角屋根が印象的だった剣稜会館は取り壊され、病棟は高層ビルに建て替わった。年々増え続ける患者に対応するため、市大病院では現在、拡張工事が進められている。写真は桜山交差点北西から南東方向を見ている。

南極観測船「ふじ」を見ようと集まった人びと

昭和 42 年

港区港町

昭和 42 年 8 月、名古屋港に入港した南極観測船「ふじ」が一般公開され、多くの市民が一目見ようと押しかけた。オレンジ色とクリーム色の明るいツートンカラーの船体が中央埠頭に横付けされると、タラップが降され、まずは早々と集まった子どもたちを艦内に招いた。氷を割って進む船首部の構造についての説明では熱心にメモを取る小学生の姿もあり、中央埠頭から西埠頭まで見学者の長い列ができた。

（提供＝名古屋港管理組合）

名古屋港管理組合庁舎の屋上から中央埠頭を眺めたようすである。南極観測船「ふじ」は、昭和 40 年に初めて南極へと出掛け、以来 18 年間活躍した後、昭和 60 年から名古屋港に永久係留されている。同 42 年のふじ来港の際は、誰もここがふじの終（つい）の棲家になるとは思ってもみなかったであろう。

庄内川のガタガタ橋

昭和 35 年

北区落合町～仲切町

写真手前が庄内川、中堤の向こうに見えるのが矢田川である。この橋は、新川中橋（しんかわなかばし）の東側に架けられた木橋で、川向こうの味鋺（あじま）との往来には欠かせなかった。伊勢湾台風の際、増水した濁流に橋脚をもぎ取られガタガタに壊れてしまったが、かろうじて残った。この後の豪雨でついに流され、その後、新川中橋（しんかわなかばし）は新しく丈夫な橋に架け替えられた。

（撮影＝臼井薫氏）

▼現在

現在、さらに東に架かる橋は「ふれあい橋」と名付けられ、人や自転車の通行しか認められない人道橋となっている。ふたつの川を挟んで両岸に広がる住宅地からは、上流の橋にも下流の橋にも遠く不便なため、多くの住民が利用する。

名鉄と市電が交差する森下交差点

昭和 46 年
東区東大曽根町

大正 4 年、市電・高岳（たかおか）線が延長され、徳川邸（徳川町）～大曽根間（0.6 キロ）が開通した。それに伴い、森下交差点では名鉄瀬戸線と市電の平面交差が生まれた。写真左手に立つのは市電の踏切用の信号塔。東西に走る瀬戸線の電車が通過するたびに、市電は待たされることがしばしばであったが、昭和 58 年、名鉄瀬戸線の森下～矢田間連続立体交差事業が完工した。（撮影＝楠正昭氏）

小牧、犬山への起点・上飯田駅

昭和 34 年
北区上飯田北町二丁目～上飯田通三丁目

名岐（めいぎ）鉄道城北線上飯田（かみいいだ）～新小牧（現在の小牧）間が開通したのは昭和 6 年。当初はガソリン車での運行だったが、同 17 年に電化した。写真中央の建物が当時の駅舎と売店、いちばん手前の建物が上飯田第一病院である。右手の飯田通を走る旧式のボンネットバス（市バス）や市電の安全地帯が懐かしい。今は電車が地下を走るようになったため、駅も線路も地上から姿を消した。（撮影＝臼井薫氏）

楠元学舎での運動会

昭和 35 年頃

愛知学院

千種区楠元町

愛知学院の歴史は古く、市内の門前町大光院内に開設された曹洞宗専門学支校に端を発する。その教育理念は、学問と同時に禅的教養を基とした「行学一体、報恩感謝」で、学徒の人格形成に努めてきた。大正 14 年、愛知中学校と改称し、戦後、新制高校が設置されると、中学と併せて愛知学院と総称されることとなった。これは昭和 28 年にできた愛知学院大学が、中学、高校と同じ敷地にあった頃の運動会風景である。左手の木立は城山。

（提供＝愛知学院）

歯学部の実習風景　昭和 37 年頃

日本で最初の私立大学歯学部として昭和 36 年に創設された。以来、医学、医療、医道を基本とする独創的なカリキュラムで、約 6,000 人を超える歯科医師を輩出している。平成 19 年度の国家試験合格率は私大では全国 1 位、国公立を合わせても 2 位という好成績であった。

（提供＝愛知学院）

現在▶

平成 18 年の楠元キャンパスの空撮である。敷地中央にそびえているのが新築なった薬学部の校舎で、この場所に旧写真で運動会が行なわれたグラウンドがあった。同大学はここ楠元のほかに日進、末盛の両キャンパスを擁している。また昭和 42 年、光が丘へ移転した愛知中学校は平成 16 年、愛知高校は 17 年に、それぞれ男子校から男女共学校となり、新たなスタートを切った。

（提供＝愛知学院）

名古屋気象台から城山を望む

昭和初期

千種区日和町～楠元町

かつて、名古屋気象台の建つ高台からは、西に旧制愛知中学と城山が望めた。愛知中学は、城山に建つ昭和塾堂と相まって当時まだ未開発だった周辺地域の教育的環境を高める原動力となった。写真左、愛知中学校舎の手前に見える長い屋根は一時、城山三郎（しろやまさぶろう）が住んだ家だったが、名古屋出身のこの作家も平成 19 年、故人となった。

（提供＝愛知学院）

現在▶

いまも残る名古屋気象台の塔上から西を見ると、坂と緑の住宅街の向こうに、栄、名駅の高層ビル群がくっきりと見渡せる。

日本初の女子商業学校

明治 42 年

現・市邨学園

東区東桜一丁目

産業立国として国の礎を築くため、女子の商業教育の必要性を確信していた市邨芳樹（いちむらよしき）は、明治 40 年、日本初の女子商業学校「名古屋女子商業学校」（現・名古屋経済大学市邨高校）を設立した。その教育に対する評価は高く、遠く満州からも入学希望者があったという。市邨は名古屋商業学校（ＣＡ）の第五代校長としてその礎を築いた人物としても知られ、同校はその女子部としてＧＣＡ（ＧはGirl's）と親しまれた。

（提供＝学校法人市邨学園）

八角堂前での記念写真　昭和 20 年代

熱田区横田町

全国的に入学難の時代となっていた大正 12 年、教育の機会均等を期し、市邨はさらに名古屋第二女子商業学校（現・名古屋経済大学高蔵高校）を設立した。八角堂はもともとＣＡにあった八聖堂が、高蔵の地に移築、利用されていたもの。昭和 33 年にはさらに名古屋女子商業高校に移転、市邨が築いた商業教育の歴史を旅することとなる。

（提供＝学校法人市邨学園）

◀現在

名古屋経済大学高蔵高等学校　（瑞穂区高田町）

日本初の女子商業学校にはじまった市邨学園は、1 世紀を経て大学院までを擁す総合学園となった。平成 18 年には 100 周年を記念し、名古屋経済大学高蔵高校および中学校が、愛知県立大学の跡地である現在地に新築移転した。

（提供＝学校法人市邨学園）

星ヶ丘交差点の南東角

昭和 35 年

千種区星ケ丘

星ケ丘団地の建設は、住宅地が東山公園を越えて東へ延びていく先駆けとなった。建設当初の足であった市電も 10 年足らずで地下鉄に役割を譲り、当時初の地下鉄に直結する団地として発展していった。また、昭和 43 年には名古屋市から「星ケ丘文教地区」の指定を受け、以来、地域を挙げて静かな環境の保全に努めている。

（提供＝名古屋市市政資料館）

現在▶

林立する団地が印象的だった星ヶ丘の交差点は、ヤマダ電機、すかいらーくなど商業施設が建ったことで、大きくその姿を変えた。星ケ丘団地は老朽化によって生まれ変わり、星ヶ丘三越の進出、ショッピングモール「星が丘テラス」の整備により、周辺はより人気の高い住宅街となった。

アーケードのついた西山商店街

昭和 36 年

名東区西山本通

西山南バス停の南である。昭和 31 年、市直轄の土地区画整理事業が施工され、日本住宅公団が昭和 33 ～ 36 年にかけて住宅団地を 4 カ所、合計 1,568 戸の住宅を建設し、一躍新しい町が誕生した。西山商店街は同 35 年から翌 36 年にかけてつくられ、アーケードも西山本通に沿ってのびている。食料品店を中心に 18 店舗が並んでいた。

（提供＝名古屋市市政資料館）

現在▶

バス路線が延伸したのに伴い、バス停は昭和 40 年代に「西山本通二丁目」と名称変更した。住宅団地も老朽化が進み、平成になってからすべて建て替えられた。商店街も大きく変貌し、開業時と同じように営業を続ける店は東側の 4 軒となった。アーケードも 20 年程前に架け替えられた。

（撮影＝荒木英夫氏）